

芦屋大学論叢 第81号  
(令和6年3月25日)抜刷

《研究ノート》

## 在外教育施設における充実した日本語教育の試み

ーポケット日本人補習授業校での道徳科授業実践からー

塩 家 崇 生  
宮 崎 大 樹



## 《研究ノート》

### 在外教育施設における充実した日本語教育の試み —プーケット日本人補習授業校での道徳科授業実践から—

塩 家 崇 生 (1)

宮 崎 大 樹 (2)

(1) 兵庫県伊丹市立鴻池小学校 主幹教諭  
(芦屋大学臨床教育学部非常勤講師)

(2) 大阪総合保育大学講師

#### 1. はじめに

在外教育施設とは、海外に在留する日本人の子どもたちのために、学校教育法（昭和22年法律第26号）に規定する学校における教育に準じた教育を実施することを主たる目的として海外に設置された教育施設である。在外教育施設は大きく日本人学校、補習授業校、私立在外教育施設の3つに分類することができる。本研究の対象とする補習授業校（以下、補習校）は日本人学校のように全日制で日本国内同様の教育課程を持つ学校とは性質が異なる。補習校に通う児童・生徒は平日に現地校やインターナショナルスクール等に通い、放課後や土曜日を利用して補習校において日本の教科書を用いた日本語による教育を受けている。日本政府は在外子女教育の重要性を鑑み、日本国内より現職・退職教員を派遣しているが小規模な補習校はその対象となっていない。そのため、小規模な補習校では現地採用教員が教育活動を担っている。在住邦人の少ない国や地域では補習校の現地採用教員の採用にあたり深刻な人手不足の状況にあり、そのため教員免許所持を採用条件としない学校が多い。その結果、現地採用教員には教員免許を持たず教職経験のない者も多いのが現状である。

そこで本研究では、将来的な現地採用教員の授業力向上を視野に入れつつ在外教育施設において道徳科の授業実践を通して日本語教育の授業改善を図ろうとした。本稿では2023年1月にタイのプーケットにある補習校で授業をする機会を得た第一筆者が補習校の実態に応じて道徳科学習指導案の検討を行い、その実践を通して明らかとなった成果と課題及び今後の改善点について授業者及び研究者の立場から述べていく。なお、本実践は関連所属校長の許可を得て実施した。

#### 2. 研究の背景

##### 2.1 補習校の概要

実践校であるプーケット補習授業校は小規模な補習校である。対象校は自前の校舎や教室を持たないため、その授業はプーケットに在る Prince of Songkla University の教室を借用して実施されている。幼稚部、小学部、中学部が設置されており、毎週土曜日に習熟度で分けられたクラスで子どもたちは学習を行っている。なお、日本からの教師は派遣されていない。そのため教師採用に関しては現地での募集となる。また、教員免許の所持については義務付けられていない。在籍する子どもたちは平日、インターナショナルスクールや現地校に通っている。タイの学校教育における道徳教育は、仏教や自らが信仰する宗教との結びつきが強い。また「善き市民」としてタイの伝統や文化の保持、国王を元首とする民主主義の支持を目指しており、日本

での道徳教育とは大きな違いがある（大塚，2021）<sup>1)</sup>。また，プーケットにはインターナショナルスクールが数校存在する。教育システムがアメリカ式やイギリス式，またフィンランド方式，カナダ方式等と多岐に分かれており，学校によってカリキュラムの違いはあるが日本で行われているような道徳科授業は存在しない。つまり，補習校に通う児童は道徳科授業を現地では体験する機会がない。

数年前から補習校において研究を行っている宮崎（2022）<sup>2)</sup> は，補習校教員へのインタビューから，「学校経営方針で小学部以上は国語のみならず道徳，生活，音楽，社会，総合的な学習などの教科を不定期に取り入れることが明記されているが，実際にはほぼすべての授業が国語であること」，またそれを「日本での教員経験の無い（日本の教員免許不保持）教員が実施していること」を明らかにしている。また宮崎（2020）<sup>3)</sup> によると家庭が望む日本語習得レベルにも差があり，同じ教室内でも日本語によるコミュニケーションを円滑にとることの難しさから授業計画は相当の配慮を要する現状であると述べている。以上のことから個々の日本語習得レベルを高めるためには，国語授業で学んだ知識技能を他教科でも生かすための機会が必要であること，また現状の児童の実態を考えた時に到達目標のある教科よりもよりよい生き方を考えるといった方向目標である道徳授業が適しているのではないかと考えた。

## 2.2 研究方法

補習校で行う授業についての依頼事項を以下に示す。

- ・1授業（45分間）である。
  - ・小学部の中級クラス児童（小学2年生の国語を中心に学習）及び上級クラス児童（小学5年生の国語を中心に学習）に在籍する児童と一緒に参加する合同授業を行う。
  - ・タブレット端末を授業で活用する。
- これらの条件を基に以下の通り検討を行っていく。

### 2.2.1 本研究における文学的文章の学習指導について

道徳の学習について浅見（2022）<sup>4)</sup> は，「授業で子供たちは，生まれてからこれまでの様々な経験を通して築いてきた自分の価値観に基づく気持ちや考えから出発し，他者の多様な感じ方に触れ，改めて自分自身を見つめ直したときに自分の感じ方や考え方をより明確にして，自分の道徳的価値観を形成していく。このように，道徳の授業は子どもの思考過程を捉えることができる。」と述べている。日本語を習得しようとする仲間と共に自分のよりよい生き方について日本語で伝え合うことで日本語習得レベルを高めるだけでなく自分の生き方について考える機会となる。また，児童だけでなく授業者も児童一人一人の思考過程を授業の中で知ることができる。さらには小集団という学習環境を生かして活発な言語活動が期待できることから，より実践的な日本語教育の場となることをねらいとした。

### 2.2.2 教材の選定理由と学習指導案の検討

本授業に参加する児童が異年齢であることから教材は低学年でも理解できる内容の教材を選定すること，また実践校の実情や児童の実態等を鑑みて学習内容についても教材理解に終始するだけではなく児童の体験や身近な生活からも考える機会をつくることを意識した。本実践では児童にとってより身近な「友達」をテーマとし，道徳科授業における低学年の定番教材「およげないりすさん<sup>5)</sup>」（内容項目：小学校低学年B-9「友情・信頼」）を使用教材に選んだ。なお，本教材は文字数が少ないため，挿絵や自身の経験等を活かした授業づくりができると考えられる。児童が教材内に存在する2つの友達関係に着目していく授業展開の中で「よりよい友達関係を築



	主題に迫る発問	すばらしい友達関係をつくっていく中で大切にすることは何だろう ・友達のことを理解する ・ひとりぼっちをつくらない ・思いやりの心を持つ ・みんなで楽しめる方法を考える ・どんな人に対しても興味を持ち、理解していくこと ・誰に対しても平等に接する ・自分ができることを探す	高学年： 「本当に相手のためになることとは何か」という視点で友情を考え、単なる仲よしではなく、磨き合い、高め合える関係を築いていくことの大切さに注目させる。
終末 7分	ふりかえり	・今日の授業で、感じたこと、考えさせられたことをふりかえりましょう。	

## 5 評価

- (1) 友達との関係を良好にするために仲良く助け合うことのよさを理解し、よりよい友達関係を築く上で自分が大切にしている心について考えることができたか。
- (2) 授業で考えたことを通して、今後の生活でも学びを生かそうとする道徳的実践意欲を培うことができたか。

### 2.2.3 補習校での授業実践に向けた事前授業の実施とその結果

作成した学習指導案の展開での事前授業を以下の通り実施した。

- ・日 時 2022年12月19日
- ・場 所 兵庫県伊丹市立鴻池小学校 ランチルーム
- ・対象者 2年1組29名及び6年1組児童33名の計62名

事前授業後に本授業について、児童を対象に①授業内容に関すること3項目(5件法)、②授業の感想[自由記述](注3)のアンケートを実施した。結果は表1及び2に示す。質問項目1及び2の授業内容に関するアンケート結果から2・6年生共に本授業からよりよい充実感を得ていたのではないかと考える。2年生の感想では「6年生のお兄さんと一緒に考えることができて分かりやすかった」、「6年生と一緒に考えることがとても楽しかった」、「6年生とたくさん話せて楽しかった」等6年生との対話を楽しみながら授業に参加していたことが分かる記述が多く見られた。また6年生の感想でも「6年生だけでは絶対に出てこない意見が出てきて面白かった」、「2年生は6年生よりもすごく面白い発想を思い付いたりして『そういう意見もあるのだな』って聞くのが凄く楽しかった」等の2年生との対話を好意的に捉えている記述が見られた。低学年の教材であったが、6年生も授業の中で2年生を含めた全体交流を通して「友達」について新たな視点で考えることができたこと、また普段何気なしに使っている言葉をより具体化する活動を通してこれまでの自分自身を違う視点から見つめることができたのではないかと考えられる。質問項目3の普段との授業の違いについてもアンケート結果から多くの児童が強く感じていたことが分かる。6年生の感想の中で「2年生との話し合いの時、言葉を簡単にして説明するのが難しかった」、「最初は2年生にどのように道徳のノートの書き方を教えたらよかったのか、また近くの人と話すときに学年が違ったりするためどのように話せばいいかが少し難しかったけど、いつもと違う感じで楽しかったです」、「同学年ですのではなく下級生とか自分達よりあまり難しい言葉を知らない人達とやる事で、自分の考えを深め合えると思った」等の記述があった。異年齢集団で行う道徳科授業は、互いに相乗効果をもたらすと考えられる。これについての検証については、別の機会に論じることとする。



表1 2年生のアンケート結果

2年生	質問項目	とても	まあまあ	—	あまり	まったく
1	きょうのきょうざい「おげないりすさん」で、「ともだち」についてかんがえましたか。	55.2%	27.6%	13.8%	3.4%	0.0%
2	6ねんせい（2ねんせい）といっしょにどうとくのがくしゅうをしたのしかったですか。	89.7%	0.0%	10.3%	0.0%	0.0%
3	きょう、やってみて、いつものどうとくのじゅぎょうとのちがいはありましたか？	69.0%	17.2%	10.3%	3.4%	0.0%

表2 6年生のアンケート結果

6年生	質問項目	とても	まあまあ	—	あまり	まったく
1	きょうのきょうざい「おげないりすさん」で、「ともだち」についてかんがえましたか。	54.5%	27.3%	15.2%	3.0%	0.0%
2	6ねんせい（2ねんせい）といっしょにどうとくのがくしゅうをしたのしかったですか。	63.6%	27.3%	6.1%	3.0%	0.0%
3	きょう、やってみて、いつものどうとくのじゅぎょうとのちがいはありましたか？	42.4%	42.4%	15.2%	0.0%	0.0%

#### 2.2.4 補習校での授業実践に向けた改善について

事前授業では導入で「友達がいるとどんなことができますか」と発問した。ここで出てきた児童の言葉を、はじめとあとの友達関係の整理をする時に活用できた。しかし、この場面以外にも使えた場面があった。一例を挙げると「遊ぶことは楽しいはずなのに、なぜはじめの場面では3匹は楽しくなかったのか」の問い返しの場面では導入で発言があった「友達と楽しく遊べる」という発言にも触れながら考えさせることもできた。導入で児童が出した「友達と遊ぶことは楽しい」という概念を崩すことで、改めてより深く考えることができたのではないかと考える。補習校での授業実践でも、児童の経験から出てきた言葉を授業者が把握し、それについて理解を示したり意味づけしたり価値付けしたりすること等を通して児童自身が新たな気づきを得られるようにすることができると考えた。

そこで、補習校での授業実践では導入の発問に対する児童の発言に注目し、その具象化に努めていく。授業者である第1筆者は補習校の児童とは今回が初顔合わせである。その導入でのやり取りを通して児童の実態把握に努め、そこで得られた情報を最大限に活かした授業を展開していく。

なお、本実践では道徳科の目標を達成することだけではなく実践的な日本語教育としても充実させていくことをねらっている。事前授業後の感想では、「難しい言葉があったけれど、6年生が分かりやすく教えてくれました」（2年児童）、「6年生のアドバイスがとても分かりやすかった」（2年児童）、「2年生と6年生では言葉の使い方や知っている言葉の数が違い、説明が上手くできなかつたり、伝わらなかつたりするけれど、それをする中で自分自身の言語力が向上するからいいのかなと思いました」（6年児童）、「交流授業は下の学年の子も6年生のやり方などを知り理解を深めることもできるし6年生は下の学年の子に教えることで人に教えたりする力が育つから良いと思った」（6年児童）等の記述があった。つまり、児童達にとって学年間による学力や経験値等の差をマイナス面と捉えず、学びを深める場としてプラス面に捉えていたことが分かった。補習校に通う児童には日本語習得レベルに差があることが予想される。授業者は発問や指示等の言語には、十分に配慮する必要がある。また、児童が発言した言葉の意味やニュアンス等が他の児童に理解されない場合には授業者が全体に理解度を確認し、その言葉の意味を発表させたり、別の言葉で言い換えさせたりしながら学びを深めさせていく支援が重要となる。考えを交流することや共有する等の言語活動を積極的に取り入れていき、より充実した日本語教育になるよう努めていく。

### 3. 結果

#### 3.1 補習校での道徳授業実践

2023年1月7日に Prince of Songkla University 内教室にて補習校児童14名を対象に行った。

授業実践の内容については、以下に示していく。

##### ア 導入 自分の体験から考える機会をつくる

発言者	発言内容
授業者	友達いる人？（児童の手が挙がる） 友達がいるからできることってどんなことがありますか？ まわりの人とどんなことができるか話し合ってください。 （近くの児童と話し合う）
児童	教えてください
授業者	助けてもらえる
児童	楽しむことができる
児童	話し合ったりできる
児童	おもちゃをかたづける
児童	遊んだりできる
児童	お話ができる
児童	チームをつくることができる
児童	新しいことができる
児童	けんかできる
児童	競争ができる
児童	一緒にゲームができる
児童	柔道ができる
授業者	友達がいるとできること、たくさんできました。 今日は友達って何かなっていうことを「およげないりすさん」を使って一緒に考えたいと思います。 （教材を範読する）

導入では授業のねらいとなる「友情」について児童の体験を基に声を出して確認する時間とした。また全体で発言することが難しい児童には保護者が付き添っており、その支援を受けながら自分の考えを発表していた。

##### イ 展開① 自分の考えを持つ機会をつくる

発言者	発言内容
授業者	どんな動物が出てきたかな？
児童	※指名された児童が発言（カメ、リス、白鳥、アヒルがいることを確認）
授業者	この4匹の友達関係について一緒に考えていこうと思います。 りすさんはどんなりすさん？
児童	やさしい。
児童	およげない。
授業者	ここでみんなに聞きたいことがあります。 <2つの絵を見せながら> どちらが好きですか？
授業者	オレンジ（左）の方の絵が好きと思った人？ <挙手なし>（図1）
児童	青色（右）の方の絵が好きと思った人？ <ほぼ全員挙手>（図2）
授業者	両方好きな人？
児童	<迷いながら挙手する一部の児童>
授業者	じゃあ、どうしてそう思ったのか近くの人と話し合ってください。



図1 左の絵が好きだと思った児童はだれもいない



図2 右の絵が好きだと思った児童は右手を挙手



授業者は問いに対する児童の実態を把握するために挿絵を取り入れながら挙手で示させた。また「両方好きな人」という選択肢を入れることでどちらにもある共通点にも注目させるきっかけとした。その後、どうしてその選択肢を選んだのかという理由を近くの児童と交流する時間を作った。道徳科授業では自分の考えをより具体化を図るためにこのような言語活動を取り入れることはあるが、日本語教育の視点からも自分の考えについて日本語を使って他者に伝える機会は日本語習得レベルを高めるために必要だと考えている。聞くだけの活動だけではなく、話す活動を要所に入れていくことも授業の中で意識をした。

展開② 児童の「わからない」に対して実態を把握ができる機会をつくる

発言者	発言内容
授業者	どうして青色（右）の方が好きだと思ったのかな？
児童	りすさんがかわいそうだったけど、およげないけどいっしょに遊ぼうって言ったから。きつとりすさんは遊ぼうっていわれて心がうれしくなったと思う。
授業者	りすさんがかわいそう。りすさんがかわいそうだと思った人？
児童	<ほぼ全員挙手>
授業者	思わなかった人？
児童	<挙手なし>
授業者	<u>わからない人？</u>
児童	<挙手なし>
授業者	かわいそうだったと思っていた人が多かったですね。（右の絵を指しながら）こっちの方が4匹が楽しそう
児童	4匹は楽しい
授業者	じゃあ（左の絵を指しながら）こっちは楽しい？
児童	楽しくない。
児童	オレンジの方は仲間外れになっているけど、青色の方は仲間外れになっていない。
授業者	青色の方は仲間外れになっていると思う人？
児童	<ほぼ全員挙手>
授業者	思わない人？
児童	<数名挙手>
授業者	<u>分らない人？</u>
児童	<数名挙手>



図3 児童に対して学習支援をする補習校教員

補習校では児童の日本語習得レベルの差があり、授業を展開していく中で授業者の問いに対して内容理解が難しい児童が出てくることを想定した。そこで、問いに対しての回答の選択肢の中に「わからない」を入れるように意識した。

本実践では補習校教員も参加しており、「わからない」と意思表示を示した場面においては参加児童の日本語習得レベルに適して支援に入った。（図3）ただし、道徳科授業の視点から考えると児童が今まで考えたこともなかったこと（授業中の発見）に対しての「わからない」もあり、これについては授業展開の中で問い返しをしたり、児童の考えに意味付けや価値付けをしたりしながら深めていった。

展開③ 自分の考えを改めて考え直す機会をつくる

発言者	発言内容
児童	青（右）の方が一緒に遊んでいる
授業者	オレンジ（左）の方も遊んでいるんじゃないの？
児童	オレンジ（左）は3匹で遊んでいる
授業者	こっち（左）は3匹？4匹じゃなくて
児童	じゃあ、聞いていい？だって泳げる人と遊んだほうが楽しいじゃないですか
授業者	だって、泳げるんでしょ？泳げる人と遊んだほうが楽しいじゃないですか？そう思った人？
児童	<挙手なし>
授業者	そう思わない人？
児童	<たくさんの児童が挙手>
授業者	わからない人？
児童	<数名挙手>

発言者	発言内容
授業者	(導入で出てきた考えの板書を指しながら) 柔道ができるって言ってたでしょ？柔道ができる人と柔道できない人が柔道しても楽しくないでしょ？
児童	う～ん…
授業者	でも、こっち（右）がいいと思った？なんで？



図4 導入を生かす授業者

教材では4匹で遊ぶ方が楽しいと考えている児童が多かったが、現実の世界で置き換えてみるとその考えが揺らぐ児童の姿が見られた。導入で友達といるとできることについて「柔道ができる」と答えた児童には、柔道の試合をする楽しさという視点から問い返しを行った。また、この後も授業を展開していく中で発する児童の発言から「りすさんがかわいそうだから、仕方なく一緒に遊ぶのですか?」、「友達だったらずっとそばにいないといけないということですか?」、「泳げる友達をたくさん誘ったらいいのに、どうして泳げないりすさんを誘ったのだろう」、「それって友達なのだろうか?」等といった問い返しを行った。これらを行うことで授業の主題である「友情」について悩む児童の姿が見られた。(図6) 適切な問い返しは学びを深めるきっかけとなる。泳げる子(同質)だけで遊ぶことと泳げない子(異質)も含めて遊ぶことの良さの交流を通して本当の友達について改めて考え直しをする機会となった。

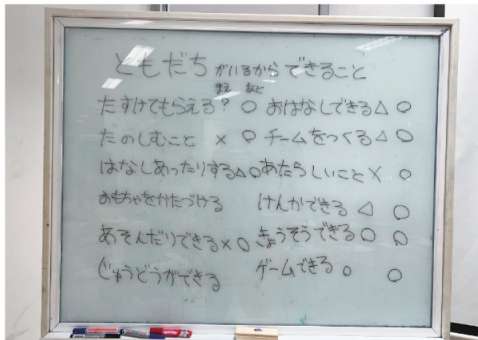


図5 導入で出てきた内容の板書



図6 「わからなくなってきた」と両手を挙げる児童



図7 本実践の板書内容

### 3.2 事後アンケート調査より

本実践が終了後、授業について参加児童及び保護者に対して調査<sup>6)</sup>を行った。そこでは以下のような回答が得られた。

#### ア 児童の様子について

- ・児童が楽しそうに授業に参加していた。
- ・日本の小学生と同等の日本語力ない為、内容や説明を理解できない生徒が多数いたが児童は積極的に参加していた。
- ・児童が本当に楽しそうに授業を受けていた。このような先生が補習校の先生だったらと思った。

#### イ 授業方法について

- ・答えは色んな答えがあって良いという事、そして理解をした児童だけに限定せず、理解していない人どちらともいえない人に対しても手を挙げて参加できるようにしている事が印象的だった。
- ・AかBか、YesかNoかという考え方ではなく、それぞれの価値観、多様性に目を向けながら道徳観についてディスカッションする機会を与えていた。児童だけではなく保護者や現地採用教員にとっても貴重な体験になった。

## 4. 考察

### 4.1 授業者視点から本実践の成果と課題及び今後の改善に向けて

本研究は在外教育施設における日本語教育の授業改善とその実践を通して現地採用教員の授業力向上が目的である。本実践では国内の現役小学校教員が補習校へ行き、そこで実際に補習校児童に対して授業を行った。現地採用教員や保護者にとって現役教員の授業を実際に見ることはこれまでの教育に対して見直したり、考え直したり、理解し直したりすることができる機会になったと保護者の事後アンケート調査内容から考えられる。特に、これまで補習校で行われていた知識注入型の授業からこれまで培ってきた知識を活かし「主体的・対話的で深い学び」のある授業へと改善を図っていくことの重要性を示すことができたのではないかと考える。

ただし、本実践は主に音声言語でやり取りをする授業であったためその内容や指示が理解できない児童がいたのも事実である。この点については、状況に応じて視覚的支援や人的支援等を行っていく必要がある。本実践ではICT機器を活用したり、現地採用教員の支援があったりしたが児童の姿からより効果的にそれらを活かす方法を考えていく必要があると感じた。これについては今後の課題としたい。

授業展開については、児童の実体験に基づいた発言とそれについての問い返しについては肌感覚ではなるが好感を得られたと感じている。事前授業からの改善点として挙げていた教材の世界から実生活へとつなげて考える工夫については効果が見られたと考える。また、「わからない」という児童の考えや思い等が児童にとって悲観的にならないようにするための学習環境づくりも重要であると考え。そもそも授業とは「わからない」ことが前提で展開されていることや、児童からの「わからない」を具象化することで新たな気づきにつながっていく。だからこそ正直に「わからない」と言える大切さも補習校の児童や教員にも示すことができたと考え。

本実践では「主体的・対話的で深い学び」のある道徳科の授業を提案したがこれまでの補習校の授業を全否定しているわけでもない。今後は知識注入型の授業とそれを活かした授業を個に応じて選択したり、循環させていったりすることが重要になると考えている。

#### 4.2 研究者視点から本実践の成果と課題及び今後の改善に向けて

本実践は道徳科の授業を通して補習校における日本語教育の充実を図ったものである。研究対象校であったプーケット補習校では通常国語の授業が多く、今回の道徳科を手立てとした本実践は児童・保護者・教員それぞれに新しい気付きをもたらしたものと考えることができる。特に「日本的」で「日本的」な道徳心を身につけてほしいと願う保護者は多いことから道徳科の実践は補習校における今後の授業を大きく改善するとともに新たな展開を生む可能性を高めたという点で本実践の意義は大きかった。つまり、保護者や児童が補習校に期待していることを「日本人教育」と捉えた場合、道徳科の授業には大きな魅力があると考えられる。

一方で日本語教育を語学の教育とした場合、道徳科の授業を通じた日本語教育の充実というアプローチには多くの課題や困難が感じられたことも事実である。そもそも補習校では、日本語を母語とする学習者に対する国語教育と日本語を母語としない学習者に対する日本語教育の区別が曖昧になりがちである。それは、補習校には日本語を第一言語とする児童がいる一方で日本語を第二、第三言語とする児童が一定の割合で在籍することから当然と言えよう。それゆえ、補習校における国語の授業は日本国内のそれより教材解釈や教授法に高度な理解や技術を要するといえる。その点、道徳科教材を用いて自らのよりよい生き方について日本語で伝え合おうという取り組みは国語教材を用いた場合よりさらに難度を高めることになる。本研究によって得た知見を活用し、再現性を持って新たな実践を展開していくためには解決すべき課題が山積していると言わざるを得ないであろう。

以上のことから今後、道徳科の授業を通して補習校における日本語教育の充実を図ろうとする場合「現地採用教員の授業力向上」に取り組むことでより高い効果を得ることが期待できる。前述の通り本来は言語教育教材ではない道徳科教材を用いて日本語教育を実践しようとする場合、授業者には通常より高い授業力が求められる。現地採用教員の授業力向上は本研究に限らず補習校に関する喫緊の課題のひとつであるにも関わらず、様々な要因により継続的に検討され続けている課題でもある。本研究により道徳科の授業を通じた補習校における日本語教育の充実を図った取り組みを提案することは授業力を向上させる目的を焦点化し補習校教員を対象とした研修の質を向上するきっかけのひとつとなる可能性がある。

## 5. おわりに

本稿では補習校での日本語教育の充実を図るために、タイの教育システムや補習校に通う児童の実態等から道徳科の授業を学びの機会の一つとして提案し、その実践を行った。本実践が補習校の現地採用教員にとって授業改善を意識するきっかけとなったと筆者は肌感覚では感じている。しかし、今後も教員自らよりよい授業について探究していく上で国内での小学校でも行われている定期的な授業研究会のような研修システムの構築が重要となると考える。ただ、本実践では補習校へ赴き授業をする機会に恵まれたが現実問題として年間に何度も現地に現役小学校教員を派遣することは難しい。そこで現地採用教員に対して Web 会議システムの活用も一考に値すると考える。今後も補習校の実態に応じた授業改善やその研修方法等について現地採用教員と共に模索していきたい。



## 注及び引用文献

- 1) 大塚豊：アジア教育情報シリーズ2 卷東南アジア編， pp.35-36， 一藝社， 2021.
- 2) 宮崎大樹：在外小規模補習授業校における主体的に自らを表現できる子どもの育成を目的とした教育の実践， 2020 年度（第 46 回）実践研究助成における研究成果報告書， p.1， 公益財団法人パナソニック教育財団， 2020.
- 3) 宮崎大樹：在外教育施設を対象とした教育行政による教員派遣制度と校内教員研修 補習授業校調査結果の規模別比較から， 紀要人間教育学研究， 第 8 号， pp.89-91， 日本人間教育学会， 2022.
- 4) 浅見哲也：「道德の授業の基盤となる学級経営」『道德と教育』第 100 回大会記念号， p.23， 日本道德教育学会， 2022.
- 5) 教材は文部科学省『わたしたちの道德』小学校 1・2 年， pp.78-81 を使用した。
- 6) 本実践終了後はアンケート調査をする時間が取れなかった為， 後日補習校長の協力を経て対象児童の保護者に調査依頼を行った。

本研究は JSPS 科研費 JP 21 K 02874 の助成を受けたものです。

## Abstract

This study was conducted at a Japanese supplementary school in Phuket, Thailand (hereafter referred to as “the supplementary school”), where the author had the opportunity to visit and give a class. In this paper, the author describes the intention of introducing moral education classes based on the actual situation of the students and their learning status, and the ideas for enriching Japanese language education at supplementary schools. The paper also clarifies points for future improvement based on the results of the practice at the supplementary schools.

